エニッドとペルスヴァル、クレチアン

『エレックとエニッド』と『聖杯の物語』における視点の交錯

武藤 奈月

「こうして事は延期され、
若者は飲んだり食べたりすることに専念した[1]。」

はじめに

クレチアン・ド・トロワは最後の未完の作品『聖杯の物語』（1182 年から 1183 年頃）によって、その名を不朽のものとした。作中では、騎士道の「き」の字も知らず森で育った若者が、とある館での夕食時、グラアルを運ぶ行列を見る。不思議に思いながらも、グラアルについて何も尋ねなかった若者が、翌朝になって目を覚ますと、館はもぬけの殻であった。この謎めいて神秘的な物語は、多くの聴衆や読者、物語作者の想像力をかき立て、今日まで連綿と続く聖杯伝説の起源となる[2]。『聖杯の物語』によって、クレチアンが、世俗的な騎士道と恋愛を主題とした四作品とは異なる次元へと足を踏み入れたのは事実である。とはいえ、ジャン・フラピエが「クレチアンが文学の領域へ投じたものは、素晴らしい物語の主題を超えた何かであった[3]」と評したように、単なる始まりであっただけではない。驚異的なグラアルについて全て

---

[1] « Einsi la chose a respitie, / S'enten[t] a boire et a mengier. » (*Le Roman de Perceval ou Le Conte du Graal*, édition critique d'après tous les manuscrits par Keith Busby, Tübingen, Max Niemeyer, 1993, v. 3310-3311, p. 141.) 以下、『聖杯の物語』の引用は上記の校訂版に拠る拙訳で、作品名は *Perceval* と記し、詩行数とページ数を示す。訳出に際しては、天沢退二郎訳（『フランス中世文学集 2 愛と剣と』、白水社、1991 年）を参照した。

[2] 後述するように、クレチアン作品では、「グラアル」はその初出場面では普通名詞にすぎなかった。後の場面ではその聖性が提示されるものの、未だ「聖杯 Saint Graal」とはなっていなかった。そのため、クレチアン作品について論じる本稿では、基本的に「グラアル」という用語を使い、その後の聖杯物語群との関連について述べる際のみ、「聖杯」の語を用いている。

[3] Jean Frappier, *Chrétien de Troyes et le Mythe du Graal. Étude sur Perceval ou le Conte du Graal*, 2ème édition corrigée, complément bibliographique par Jean Dufournet, CDU et SEDES, 1979, p. 5.（ジャン・フラピエ『聖杯の神話』、天沢退二郎訳、筑摩書房、1990 年、6 頁。引用文は天沢訳。）

を明かすことなく、少なくない謎を未解決のままに残したその語りも、多くの研究の対象となってきたのであり[4]、十三世紀に発展する聖杯物語群との比較研究も数多く存在している[5]。ミシェル・ザンクは聖杯物語群についての概論中で、クレチアンの『聖杯の物語』に特徴的な、謎を意図的に残した韻文の魅力と、例えば登場人物の行為の一部始終といった、全てを詳細に語ろうとする散文の技法を対比させている[6]。グラアルという神秘的な主題の導入と謎めいた語りが融合し、抗いがたい魅力を持った作品となったのは間違いないのだろう。クレチアンの『聖杯の物語』は、当初から、まさしくその語りや省略が、聖杯というテーマに合致していたのであり、後代の物語作者たちは、クレチアンが残した空白を埋めようと試みる。ところで、ミシェル・ザンクの言うところの、クレチアンの省略された語りは、韻文に特有なのだろうか？　クレチアン作品を含む聖杯物語群に特有なのだろうか？　あるいは、クレチアンに特有なのだろうか？　遺作『聖杯の物語』で初めてクレチアン流の語りが展開されたわけではなく、むしろアーサー王を題材とした他作品で既に独自の技法を用いていたのではないだろうか。この点については、今日に至るまで、クレチアンの『聖杯の物語』と他作品との語りを検討した研究は少なかったように思われる。本稿では、最初の作品である『エレックとエニッド[7]』（1170 年頃）と『聖杯の物語』の比較検討を通して、両作品に

---

[4] 『聖杯の物語』においてクレチアンが用いた謎めいた語りや暗示の技法については、例えば以下を参照。Michel Stanesco, « Le chemin le plus long : de la parole intempestive à l'économie du dire dans le *Conte du Graal* », in *An Arthurian Tapestry* : *essays in memory of Lewis Thorpe*, ed. Kenneth Varty, Glasgow, University of Glasgow, 1981, p. 287-298 ; Francis Dubost, Le Conte du Graal *ou l'art de faire signe*, Champion, 1998.

[5] 例えば Katalin Halász, « Le narrateur et sa fonction interprétative : *Le Conte du Graal* et *Perlesvaus* », in *Analyses de romans*, Studia romanica Universitatis Debreceniensis de Ludovico Kossuth nominatae : series litteraria, t. XI, 1985, p. 3-25 は『聖杯の物語』とこれを継承すると称した、十三世紀前半の散文『ペルレスヴォ』（『聖杯の高き書』）における語り手の比較を行っている。また、エレーヌ・ブジェはクレチアンの『聖杯の物語』が発端となった、聖杯を題材とした物語群における「謎」のエクリチュールの相違を検討している（Hélène Bouget, *Écritures de l'énigme et fiction romanesque. Poétiques arthuriennes (XIIe-XIIIe siècles)*, Champion, 2011）。

[6] 「だが実のところ、聖杯に関しては、より少なめに語り、より多くの陰を残しておけばおくほど、理解しやすいのである。中世の散文のエクリチュールに特有の過剰さもある。韻文のエクリチュールは省略法を促進するが、散文の物語というのは全てを語る物語なのだ」（Michel Zink, « Le graal, un mythe du salut », dans *Le regard d'Orphée. Les mythes littéraires de l'Occident*, dir. Bernadette Bricout, Seuil, 2001, p. 76.）

[7] 以下、テクストの引用は *Érec et Énide*, Édition critique d'après le manuscrit B. N. fr. 1376, traduction, présentation et notes de Jean-Marie Fritz, Librairie Générale Française, 1992 に拠る拙訳。作品名を *Érec* と記し、行数とページ数を示す。

見られる謎の意図的な利用を示すことを目指す[8]。遺作『聖杯の物語』と、『エレックとエニッド』を比較することで、クレチアンがアーサー王物語に取り組んだ当初から、段階的な語りと視点の交錯を効果的に利用しながら、いわば情報を制約された語りを採り入れていたことを明らかにしたい。なお、「段階的な語り」という語は、これまでのクレチアン研究でも指摘されてきた、「漸層法 gradation」の技法、すなわち一度に全てを語ることなく、徐々に出来事や登場人物に関する情報を加えていく語り方を指し示す。これにより、聴衆あるいは読者にとっては、始めは制限された情報しか得られないが、徐々に深い次元での理解が可能となる。

まず、『エレックとエニッド』と『聖杯の物語』の前半を並行的に見ていくことによって、語り手が物語内の事象や登場人物の心理を看過している点を指摘する。次に、ここで語り手が沈黙したと考えられる事項に関して、登場人物が徐々に解明を行う場面を分析する。最後に、以上の場面の間に組み込まれた、語り手の主観的意見や態度の表明を検討することで、登場人物と語り手との間での視点の交錯が戦略的に組み合わされていることを明らかにしたい。以上のテクスト読解を通して、情報を制約された語りがクレチアンの作品の至る所に見られることを示し、他の物語作者とは明らかに異なる特質を浮き彫りにすることが本稿の目的である。

I 宙吊りにされた語り

まずは、『エレックとエニッド』のあらすじを確認しておきたい。この作品は、不倫関係を前提とした「至純の愛」とは正反対に、夫婦愛を描いた物語であり、類似した音を名前に持った二人が主人公である[9]。全編を通して、その出会いと結婚、軋轢と和解の過程が描かれる。復活祭の日、ラック王の

---

[8] この作品に見られる謎については、以下を参照。Douglas Kelly, « La forme et le sens de la quête dans l'*Érec et Énide* de Chrétien de Troyes », in *Romania*, t. XCII, 1971, p. 326-358 ; Liliane Dulac, « Peut-on comprendre les relations entre Érec et Énide ? », in *Le Moyen Âge*, 1994, nº 1, p. 37-50. なお本論中で「謎」とは、作中における事実や登場人物の行為の理由や結果に関する十分な理解を妨げるものであり、不確定な状態のままに置かれた事柄を指し示す。後述の通り、一部の謎は解明されるものの、語り手がそれを明示するとは限らず、読者の解釈に委ねられている場合も多い。

[9] 作品全体については、Jean Frappier, *Chrétien de Troyes*, Hatier, 1968, p. 82-103（『アーサー王物語とクレチャン・ド・トロワ』、松村剛訳、朝日出版社、1988 年、p. 108-132）および渡邉浩司「クレチアン・ド・トロワ」（原野昇編『フランス中世文学を学ぶ人のために』、京都、世界思想社、p. 56-58）を参照。

息子であるエレックは、アーサー王宮廷で催された白鹿狩りの途中、宿泊した館でエニッドと出会う。彼女を妻として迎え、聖霊降臨祭の日に結婚式を挙げる[10]。しかしエニッドは、夫が新婚生活ゆえに騎士としての務めを疎かにしているという噂を信じ、嘆きの言葉を漏らす。これを聞いたエレックはエニッドを連れ冒険に出発する。とはいえ、この突然の出立の真の理由は不明なままに残され、唯一、ヒロインであるエニッドの視点[11]のみを通して出来事やエレックの行為を知ることが可能となる。旅を経て、エレックはエニッドを試練にかけたことを自ら明かす。

クレチアン自身がこの作品のプロローグで、一貫性を持たず伝承されていた「話 conte」に対抗し、自身の物語の統一された「構想 conjunture[12]」を誇ったように、その物語る技法は、中世においては珍しいものであった。当時の作品を、仮に現代の一般的な物語論の枠組みで解釈しようと試みれば、「物語 roman」とはたいていの場合、物語られる事象について、作中の登場人物よりも精通した「全知の語り手」あるいはそれに近い性質を持った語り手が、自らは物語世界に参加することなく（「異質物語世界的な語り手」）、三人称で出来事を語っていたと言えよう[13]。一方でクレチアンの作品における語り手は、ある登場人物の視点を通して、見えたものをそのままに語るため、一部の情報しか与えない。語り手が全てを明かすことはなく、むしろ作中の登場人物による段階的な解き明かしを自身の語りに先行させている[14]。このように、『エレックとエニッド』においても、『聖杯の物語』と同様に、物語の核心となる出来事は、登場人物の目から知覚され登場人物の口から語られ、時には語り手自身も意見を付け加える。

---

[10] この場面の直後に、「ここで最初の詩句が終わる。」（« Ci fine li premerains vers. », *Érec*, v. 1840, p. 158.）という言及があり、二人の出会いと結婚が物語の第一部を構成している。

[11] 本論における「視点」とは、物語論において用いられる一般的な意味において、物語られる状況で誰が情報を知覚しているか、を指す。

[12] 「（クレチアンは）冒険の話から見事な構想を引き出すのです」（ « Et trait [d’]un conte d’aventure / Une mout bele conjunture »）（*Érec*, v. 13-14, p. 28.）

[13] 同時代作品としては、「古代物語」に分類される『テーベ物語』や『エネアス物語』、『トロワ物語』、あるいはクレチアン作品と同じ「ブルターニュ物語」に属する、ベルールやトマによる『トリスタン物語』を参照されたい。

[14] ここで言う「語り手」と実在の作者とは区別されるべきである。『エレックとエニッド』の 26 行までのプロローグにおいて、作者はクレチアン・ド・トロワと名乗り自身の文学的マニフェストを示すが、それ以降の詩行において、クレチアンという名が実名であれ筆名であれ、現実に存在していた作者と語り手を関連付けることは危険である。作品の虚構世界において「私」と名乗る人物は、実在した作者でもクレチアンという仮の作者でもなく、物語に内在し、その話を語る媒介者である。

具体的に、『聖杯の物語』における最も著名な場面、すなわちグラアルの登場する場面と、『エレックとエニッド』の前半の場面を比較することで、クレチアンの物語の特徴を考えてみたい。『聖杯の物語』では、外界と接することなく、「荒れ森 gaste forest」で母親一人に育てられた若者 —— 後に自身が「ペルスヴァル」という名前であることを「見抜く deviner」 —— は、騎士を見て憧憬を抱き、冒険へと出発する。騎士道からは程遠い、粗野な振る舞いを次々と披露する若者であったが、ゴルヌマン・ド・ゴルオーという賢人から騎士道の手ほどきを受け、乙女ブランシュフルールを窮状から救い出す。この若者はとある川で釣り人に出会い、その館へと招待される。夕食の際、若者は不思議な行列を目撃する。若者と館主が歓談している間、他の部屋からは小姓が入ってきて、手には槍を捧げ持っていた。この槍からは一滴の血が流れ落ちていた。直後、燭台を持った、また別の小姓が二人入って来る。さらに続いて、主人公はグラアルと語り手が呼ぶ物体を運んでいる行列を目にする。

> 両手にグラアルを捧げ持ちながら、小姓達とともに乙女がやって来たのであるが、この乙女は美しく優雅でたいそう気品があった。彼女がグラアルを捧げ持って部屋の中に入った時、あまりにも明るくなったので（Une si grans clartez i vint）、まるで太陽や月が昇る時に星が明るさを失ってしまうように、ろうそくの火の光も弱まったかのようであった[15]。

その直後には、グラアルが黄金で作られ、高価な宝石もはめ込まれていたことが語られる。グラアルの後には、銀の肉切り台が運ばれて来て、これら全ての行列は別の部屋へと入って行く。

この場面では、語りがいわば宙吊りにされている。語り手は行列の描写に専念し、後にその性質が明かされることになる、不可思議な容器の正体に関しては、解説を全く付け加えていない。グラアルの登場場面で、語り手が焦点を当てているのは、この物体に起因すると思われる部屋の明るさの強さである。中世において光は、ステンドグラスの輝きに見られるように、神の世界を暗示するものであった。グラアルは当初から、神秘的なものとして提示されている。しかしながら、聖杯物語群における聖杯の登場場面を検討した

---

[15] « .I. graal entre ses .ii. mains / Une damoisele tenoit, / Qui avec les vallés venoit, / Bele et gente et bien acesmee. / Quant ele fut laiens entree / Atot le graal qu'ele tint, / Une si grans clartez i vint / Qu'ausi perdirent les chandoiles / Lor clarté comme les estoiles / Quant li solaus lieve ou la lune. » (*Perceval*, v. 3220-3229, p. 137.)

フランシス・デュボストが、いみじくも「光の衝突 conflit des lumières[16]」と呼んだように、テクストの 3224 行以降に基づいて推察する限り、この場面での光の発生源には、複数の可能性が考えられる。輝きを放っているのは、グラアル本体なのだろうか？　それとも、光を発しているのは部屋の燭台の蝋燭であり、グラアルやそれに埋め込まれていた宝石がそれを反射しているのだろうか？　3226 行目に見られる副詞の i は、おそらく若者と館主が夕食を取っていた室内を指す。その後に描写されるグラアルの特徴に鑑みても、グラアルが部屋の明かりを受け、光り輝いていたのは確かであるように思われる。あるいは語り手は、グラアルを捧げ持った乙女の、光輝くような美しさをも強調しているだけなのだろうか？　そもそも、グラアルとは何なのだろうか？　テクストからは、グラアルがどのような性質を持っているのか、この時点では読み取ることは不可能である。直前の場面で、グラアルの前に部屋を通過した、血の滴る槍においては、少なくとも、明らかに超自然的な要素を見て取ることができるだろう。深紅の血を小姓の手に至るまで自動的に流す槍は、「驚異 merveilleux」に属する物体である。ところがグラアル本体には、その並外れた輝き以外に、何ら驚異的な要素を認めることができないのである。「グラアル graal」という単語も、クレチアンが固有名詞として初めて用いたのでは決してなく、比較的大きく、深めの皿を表す普通名詞であった[17]。かくしてこの容器の登場場面では、主人公の若者がそれを目にし、部屋を通過して行ったという、後に重要であったことが明らかになる布石だけがなされる。

続いて比較検討のため、『エレックとエニッド』において説明や描写が宙吊りにされている場面を見ていきたい。作中の語り手は、エレックについてはほとんど沈黙しており、その行動のみを語る一方で、エニッドの心理描写は積極的に行い、彼女の視点から出来事を語る。

物語の冒頭、エレックは、とある貧しい陪臣の館に泊まる。そこで出会った娘エニッドの姿は詳細精緻に描写され[18]、エレックはその美しさに圧倒される。

---

[16] Francis Dubost, « Le conflit des lumières : lire *tot el* la dramaturgie du Graal chez Chrétien de Troyes », in *Le Moyen Âge*, t. XCVIII, 1992, p. 187-212.

[17] 十音綴の『アレクサンドル物語』(1160 年頃) には既に、「あなたのグラアル ton graal」という表現が見られる（*Medieval French Roman d'Alexandre*, vol. III : version of Alexandre de Paris : variants and notes to branch I, ed. Alfred Foulet, Princeton, Princeton University Press, 1949, v. 611, p. 91）。

[18] *Érec*, v. 411-447, p. 56 et p. 58.

> エニッドは、これまでに会ったことのなかったその騎士を目にした時、少し後ろで立ち止まった。彼女はその人を知らなかったので、気恥ずかしくなって顔を赤らめた。エレックとはいうと、エニッドがひときわ美しいのを見て唖然とした[19]。

エニッドへの一目惚れと呼べる場面であるが、ここで用いられている単語 *s'esbahir* とは、原義では恐怖を表す強い意味である。エニッドの人間離れした美しさに呆然となったエレックは、畏怖にも似た感情を抱く。しかしエニッドに関してはその臆病な性格や心理が描写されているのに対して、エレックは行動の停止だけが描写されるのは、些か不均衡ではなかろうか。とはいえ、少なくとも語り手は、作品の第一部、すなわち二人の出会いと結婚式までは、エレックについても心理描写を行っていたと言うことが可能である。

物語の中盤以降となる、二人の結婚式から不和の発生、その修復に至るまで、語り手はエレックの心理描写を中断する。この間はエニッドの視点から、その内的独白を通して、作中の出来事が知覚されることになる。エレックはエニッドを妻として迎える決心をする。アーサー宮廷での結婚式後、二人は安寧に暮らすが、やがてエレックがエニッドゆえに新婚生活に溺れ、馬上槍試合にも参加せず、騎士としての務めを果たしていないという噂が広まる。噂を真に受けたエニッドは不安を募らせ、ある朝、一人で思わず嘆きの言葉を漏らす。

> そしてエニッドは「何と不運にも、私は国を離れてしまった！　一体何を求めてここへと来たのでしょう。」と言う。
>
> ［…］
>
> そしてエレックに向かって、「あなたは何と不運なのでしょう！」と口にした[20]。

直接話法による長いエニッドの独白中、冒頭の 2492-2493 行はエニッドの独り言にすぎない。しかし 2503 行では間接目的語を示す li が見られ、エニッドは傍らで眠るエレックに対して呟きを漏らす。最後の言葉の部分を聞いていたエレックが目を覚ますと、エニッドは狼狽して涙を流し、涙の理由を隠

---

[19] « Quant ele le chevalier voit, / Que onques mais veü n'avoit, / Un petit arrieres s'estut : / Por ce qu'ele ne le connut, / Vergoigne en ot et si rougi. / Erec d'autre part s'esbahi / Quant en li si grant beauté vit. » (*Érec*, v. 443-449, p. 58 et p. 60.)

[20] « Et dit : " Lasse, con mar m'esmui / De mon païs ! Que ving ça querre ? / [...] / Lors li a dit : " Con mar i fus ! " » (*Érec*, v. 2492-2493 et v. 2503, p. 204 et p. 206.)

そうとする[21]。エニッドを問い詰め事情を知ったエレックは、直ちに旅立ちの準備をするように妻に言う。

> エレックは「奥方、あなたにはそう言う資格があります、というのも私を非難する人々は正しいのですから。」と言い、「すぐに準備をして、馬に乗る支度をしなさい、さあ起き上がって、一番綺麗な服を着て、一番良い儀仗馬に鞍を置きなさい。」と命じた[22]。

エレックは命令形の動詞五つを重ね、畳み掛けるように用いて出発を急かす。その動機はエレック自身の口からも語り手からも明かされない。語り手はエニッドに関しては「エニッドは狼狽して、たいへん悲しくなり思い悩んだまま起き上がる[23]。」という描写を付け加えるものの、エレックに関しては沈黙する。語り手によるエレックとエニッドに対する心理分析には差異がある。エレックはなぜ、エニッドを連れて冒険に出発する必要があったのであろうか。なぜ馬上槍試合にすぐに参加し武勲を証明することなく、妻と旅に出ることを選んだのだろうか。

エレックの突然の出発を知った人々はみなひどく悲しみ、とりわけエレックの父ラック王は息子に出発の理由を尋ね、旅の安全のため、他の騎士も連れて行くように勧める。すると、語り手が「エレックは結局、ラック王に返事をして、どうして旅を始めるのかを王にすっかり詳しく話した[24]。」と述べるように、エレックが父王と話したことが分かる。直後には、エレックの言葉が直接話法で引用され、エレックは自分の妻しか連れて行く気が無いと宣言し、また自分に万一の事が起きた際のエニッドの身の安全をラック王に託す[25]。この場面では少なくとも、エレックが単に怒りに任せて出発を決定

---

[21] この独白は作中でエニッドが初めて直接話法により発する言葉だということは象徴的である。クレチアンは彼女の長い独白の場面をより劇的に演出しようとする仕掛けを作り出している。特にアーサー王物語における言葉と沈黙については、Danièle James-Raoul, *Parole empêchée dans la littérature arthurienne*, Champion, 1997 を参照。

[22] « “ — Dame, fait il, droit en eüstes, / Car cil qui me blasment ont droit. / Aparoilliez vos orendroit, / Por chevaucher vos aprestez ; / Levez de ci, se vos vestez / De vostre robe la plus bele / Et faites metre vostre sele / En vostre meillor palefroi. ” » (*Érec*, v. 2572-2579, p. 210 et p. 212.)

[23] « Or est Enide en grant esfroi ; / Mout se lieve triste et pensive ; » (*Érec*, v. 2580-2581, p. 212.)

[24] « Erec respont a la parsome / Et se li dit tot a devise / Coment il a sa voie emprise » (*Érec*, v. 2712-2714, p. 220.)

[25] *Érec*, v. 2719-2727, p. 222.

したのでないことは読み取れる[26]。ただし、その真の理由について、語り手はこの時点では明らかにしていない。エレックの動機の解き明かしには、彼自身の言葉を待つことになる。

後述するように、語り手はこの場面でエニッドの視点とエレックの沈黙を戦略的に用いているのである。二人の間の摩擦がエニッドの言葉によって引き起こされたとすれば、それを修復するのもまたエニッドの発する言葉である。そして、エレックの沈黙に隠された心理が明らかになるのは、二人が冒険を経た後でなければならない。クレチアンは、主人公二人を最終的にどこへ導くのか、物語の始まった時点で既に配慮している[27]。武勲と結婚生活を主題とした物語の核心部分を隠すことで、夫婦関係の修復の過程そのものを描いていると言えよう。

II 段階的な謎の解明

エレックはなぜ、エニッドを連れて冒険に出ることにしたのだろうか。当時の物語に見られる騎士の多くは、領地や結婚相手を求めて旅をする者や、主君や意中の奥方の命で出発する者であり、エレックの出立は不可思議である。そして、出発を妻に命じた際、彼は何を考えていたのだろうか。この時点では、語り手がこれらの疑問に直接答えることはない。エレックの発言や態度の変化の描写のみがその答えを知る手掛かりとなる。引き続き、『エレックとエニッド』のストーリーを追うと、徐々にエレックの心理の真相が明らかになる。旅に出発すると、エレックはいかなることがあっても自分に話しかけることを禁じ、上質な服を着たエニッドを先に騎行させる。

---

[26] エレックが出発を決心した際の夫婦の精神状態や過失を巡って、諸家の解釈を総括したのが René Ménage, « *Érec et Énide* : quelques pièces du dossier », dans *Mélanges de langue et littérature françaises du Moyen âge et de la Renaissance offerts à Charles Foulon*, Rennes, Université de Haute-Bretagne, t. II, 1980, p. 203-221 である。この作品が夫婦の成長の物語である以上、エレックに関する人々の間の噂を盲目的に信じ、不安をエレックに告げることもしなかったエニッドに非があることは明白であるように考えられる。エニッドの過ちを認める研究者は多い一方、エニッドの嘆きの言葉を聞いた場面で、エレックが我を忘れ怒りという過ちを犯しているか、あるいはこの時点からエレックは自己を制御しており、エニッドを責めるために怒りの感情を表したのかについては意見が分かれている。とはいえ、エニッドの身を父王に託していることからも、冷静沈着に判断を下していると見なせよう。

[27] *Ibid.*, p. 203.

> エレックは「全速力で進んで行って、何かを見たとしても私に敢えて話しかけようなどと思わないようにしなさい。私から先にそうするのでなければ、私に話しかけないようにしなさい［…］。」と言う[28]。

冒険の一日目、エレックの言葉に落ち込みつつも、前方を進んでいたエニッドは、自分たちを今にも襲撃しようとする三人の騎士を認める。エニッドは夫の命令に従って沈黙を守るべきか、あるいは襲撃者の存在を知らせるか躊躇する。内的葛藤の末、エニッドは近づいている危険を知らせる。

> 「ああ神さま！　どう言えば良いのかしら？　相手は三人で殿は一人なのだから、殺されるか捕らわれてしまうでしょう。一対三というこの対戦は全然公平ではありません。こちらの者がまず攻撃するのでしょう、殿は気づいていないのですから。まさか！　では私は、思い切って彼に伝えることもできないほど臆病だと言うの？　いいえ、そこまで臆病ではないのだから、彼に言いましょう、このままにはしておけません。」とエニッドは言った[29]。

エニッドが口を開いて危険を伝えると、エレックは約束を破ったことについて、妻に怒りを露わにする。

> エレックは「何だって？　何と言った？　全くあなたは私のことを少しも尊重していない。私の命令と禁止を破ったのだから、ずいぶんと厚かましいことをしたものだ。今回は許されるが、もしもまた次の時もそうするのなら、決して許されないだろう。」と言った[30]。

エレックは口をきいたことに対して叱責と警告をする。そして二人の身の安全を守るために戦う。これは冒険の一日目に見られる、エニッドの葛藤とエレックの反応の最初のやり取りである。夫婦に危険が迫る毎にエニッドは危

---

[28] « “ Alez, fait il, grant aleüre, / Et gardez ne soiez tant ose, / Se vos veez aucune chose, / Que vos me dïez ce ne qoi. / Gardez ne parlez ja a moi, / Se je ne vos aresne avant [...]. ” » (*Érec*, v. 2764-2769, p. 224.)

[29] « “ Dex ! fait ele, que porrai dire ? / Or iert ja morz ou pris mes sire, / Que cil sont troi et il est seus ; / N’est pas igaux partiz cist jeus / D’un chevalier encontre trois. / Cil le ferra ja par detrois, / Que mes sire ne s’en prent garde. / Dex ! serai je donc si coharde / Que dire ne li oserai ? / Ja tant coharde ne serai, / Je li dirai, nou leirai pas. ” » (*Érec*, v. 2829-2839, p. 228 et p. 230.)

[30] « — Quoi ? fait Erec, qu’avez vos dit ? / Or me prisiez vos trop petit. / Trop avez fait grant hardement, / Que avez mon commandement / Et ma desfense trespassee. / Ceste foiz vos iert pardonee, / Mais, s’autre foiz vos avenoit, / Ja pardoné ne vos seroit. ” » (*Érec*, v. 2845-2852, p. 230.)

険を知らせ、同様のパターンは冒険の二日目、三日目にも繰り返されている[31]。とはいえこれらの戦いは、エレックが武勇を発揮する機会からは程遠い。襲撃者とは、旅する二人に攻撃をしてくる強盗やエニッドの美に目をつけた領主であり、エレックは圧倒的な力の差を見せる。つまり、二人が出会う冒険とは、互角な騎士との戦闘によりエレックの武勲を立てるためではなく、むしろ旅の途上での純粋な自己防衛のための戦いにすぎない[32]。エレックが「惰弱 recreanz[33]」と見なされてしまったことが夫婦の危機の原因であり、第一部以降の冒険が彼の名誉を取り戻すためであったとすれば、エレックはより直接に武勲を証明する機会を設けることを選ぶはずではないだろうか。自分の評判が落ちているという噂をエニッドから聞いたエレックは馬上槍試合に再び参加するのではなく、妻と旅に出ることを選択する。そして騎行中にいかなることがあっても自分に話しかけることを禁じた理由も、エレックの口から、あるいは語り手の口からも明かされないままに残される。

冒険の四日目、エレックはとある乙女の請願に従って、巨人を倒し、捕らわれていた乙女の恋人を解放する。ところがエレックはこれまでの疲労のあまり意識不明となり、夫を失うと感じたエニッドは絶望する。エニッドはリモール伯に目を付けられ、その城で強制的に結婚させられそうになるが、毅然としたまま、夫が目を覚まさないうちは飲食もしないと言う[34]。そして自傷行為を仄めかすことで、結婚の試みも無効化させようとする。

---

[31] 一回目は 2829-2839 行でエニッドの心理的葛藤、 2845-2852 行がエレックの台詞で命令を破ったエニッドを非難しており、二回目は 2962-2978 行および 2993-3006 行でほぼ同一のやり取りが繰り返される。 三回目では、3549-3558 行でエニッドは耐えられずに警告の言葉を発している。それに対するエレックの返答は 3559-3566 行に見られる。

[32] 「試練の時におけるエレックの武勲はまさしく騎士道的な行為ではなく、むしろたいていの場合は自身の身を守るためと、妻の名誉を守るためのものである。」(Mario Roques, Compte rendu de Myrrha Borodine, *La femme et l'amour au XIIe siècle d'après les poèmes de Chrétien de Troyes*, Picard, 1909, dans *Romania*, t. XXXIX, 1910, p. 380, note 2, cité par Penny Sullivan, « The education of the heroine in Chrétien's *Erec et Enide* », in *Neophilologus*, t. LXIX, 1985, p. 322.) そのため、強盗と戦うエレックの行為は卑近であり、滑稽な印象すら与え得る。『エレックとエニッド』における戦いの喜劇性については、« La représentation des combats chevaleresques dans *Érec et Énide* de Chrétien de Troyes : les intermittences de la chevalerie », dans *Un transfert culturel au XIIe siècle :* Érec et Énide *de Chrétien de Troyes et* Erec *de Hartmann von Aue*, éd. Patrick Del Duca, Clermont-Ferrand, Presses universitaires Blaise-Pascal, 2010, p. 85 も参照。

[33] *Érec*, v. 2462, p. 202.

[34] *Érec*, v. 4808-4812, p. 370.

> ああ！　卑怯者、お前が何を言おうと何をしようとそれが私にとって何になるというのです？　私はお前に叩かれるのも脅されるのも恐れはしません。どうぞ存分に私を打って、叩いて下さい。たとえお前がその手で私の目をもぎ取るとしても、生きながら皮を剥ぎ取るとしても、私がお前のために何かをするほどには、お前を乱暴と思うことなどありませんから[35]。

第一部の場面中では何らの言葉も発することのなかったエニッドの精神的な変化が読み取れよう。エレックは驚き悲しんで目を覚まし、伯へと飛び掛かり、エニッドを自分のもとへと取り戻す。エニッドの言葉は、それを聞いたエレックを覚醒させる機能を持っている。

これらの冒険を経た後、エレックはエニッド自身を試練にかけたことを告白する。

> エレックはエニッドを抱きしめて言った。「妹よ、あなたを全てにおいて試したのです。もう何も恐れることはない、あなたのことは今までにないほど愛しているし、あなたが私をとても愛してくれていることがまた分かったのですから［…］[36]。」

『エレックとエニッド』における言葉とは、二人の愛を問う試金石であった。冒険の途上、度重なる危険に際してエニッドが発した言葉は、それまでの言葉とは異なっている。第二部の始め、エニッドがあの朝に発した言葉は夫婦に亀裂をもたらした。冒険に出発してから発したエニッドの言葉とは、二人の危機を救うための言葉であった。そして絶体絶命と思われた場面におけるエニッドの叫び声は、エレックを蘇生させただけではなく、二人の関係の修復を導く。エレックは、禁じられているにもかかわらず、エニッドが警告を発したことで自身への愛情を再確認する。エレックがエニッドに上等な服を着させたのも、勝手に話しかけることを禁じたのも、意図的に自分たちを危険にさらすことで、エニッドの反応を試すためであったと考えられる。エニッドもまた、この時のエレックの言葉から再び愛を感じ取ることが可能とな

---

[35] « ‘‘ Ha ! fel, fait ele, moi que chaut / Que que tu me dies ne faces ? / Ne crien tes copx ne tes menaces. / Assez me bat, assez me fier : / Ja tant ne te troverai fier / Que por toi face plus ne mains, / Se tu orendroit a tes mains / Me devoies les iauz sachier / Ou [tres]toute vive escorchier. ’’ » (*Érec*, v. 4838-4846, p. 372 et p. 374.)

[36] « L’estraint et dit : “ Ma douce suer, / Bien vos ai dou tot essaïe. / Ne soiez de rien esmaïe, / Q’or vos ain plus que ainz ne fis, / Et je resui certains et fis / Que vos m’amez parfaitement [...].” » (*Érec*, v. 4914-4919, p. 378.)

り、夫に対する猜疑心も消え失せる。かくして二人は相思相愛の関係へと戻る。

『エレックとエニッド』では、エレック自身がその行為の動機についての告白と説明を行った。ここで再度『聖杯の物語』に目を向けると、『エレックとエニッド』との着目すべき共通項として、語り手自身は沈黙を守り、ペルスヴァルが冒険の途中で出会う人物に間接的に語らせていることが指摘できる。さらに『聖杯の物語』では、複数の登場人物による、ペルスヴァルとグラアルを巡る謎の解明が錯綜している。

『聖杯の物語』の主人公である粗野な若者がアーサー王の宮廷を初めて訪れた際、そこには六年間笑ったことのなかった乙女がいた。乙女は騎士になりたいと主張して突然訪れた若者の乱暴な言動を見ると、目をひそめることも咎めることもせず、彼に微笑みかけて言う[37]。

> そして乙女は若者に笑いかけ、そして笑いながら「若者よ、私が心の中で思っていることですが、たとえあなたが長い間生きるとしても、あなたよりも優れた騎士は世界中でも現れないでしょうし、そのような人が知れ渡ることもないでしょうと、私はそんな風に信じているのです。」と言った[38]。

乙女は *penser*, *cuidier*, *croire* という、ほぼ同義の三つの思考動詞を並べており、自身の主観的意見であることを強調している。ここでは登場人物の台詞を利用して、森で育った礼節を知らない若者が優れた騎士へと成長するための布石がなされている。この乙女の発言について、アーサー王宮廷の道化はさらに予言する。

> というのも道化は、「この乙女はいずれ騎士道の最高位に立つ人を見るまでは笑わないだろう。」と、常々言っていたからである[39]。

---

[37] 中世文学における「笑い」については、Philippe Ménard, *Le rire et la sourire dans le roman courtois en France au Moyen âge (1150-1250)*, Genève, Droz, 1969 を参照。魔術師メルランの「笑い」にも見られるように、笑いはしばしば予言者の超越性と結びつく。

[38] « Et ele lui et si li rist, / Et en riant itant li dist : / “ Vallet, se tu vis par eage, / Je pens et croi en mon corage / Qu’en trestot le monde n’avra, / N’il n’i ert n’en ne l’i savra, / Nul meillor chevalier de toi ; / Einsi le pens et cuit et croi. ” » (*Perceval*, v. 1037-1044, p. 43.)

[39] « Por che que li sos soloit dire : / “ Ceste pucele ne rira / Jusqu’atant que ele verra / Celui qui de chevalerie / Avra toute la seignorie. ” » (*Perceval*, v. 1058-1062, p. 44.)

ペルスヴァルの将来に関する予言は二人の登場人物の台詞を通して二重化されている。いかなる点において優れた騎士であるのか、乙女も道化もこの時点で詳述せず、語り手も意見の追加をしていないが、若者の潜在的な資質が暗示される。乙女と道化はその発言ゆえに宮廷の家令クーの不興を買い、平手打ちを受けるが、後述するように、語り手はこのエピソードをも伏線として回収していく。そして二人の言葉通り、ペルスヴァルは騎士道的態度を身につけていく。

以下の場面では、館の外で釣りをしていた人物とグラアルについての事実の一部が明かされる。グラアルを見た城で質問を発しなかった後、つまり冒険に失敗し、無人となった城を後にすると、若者は自身の従姉妹と名乗る人物に出会う。この従姉妹は、一連の謎の解き明かしを行う人物のうち、最初に彼が出会う人物である。従姉妹に城での出来事を語る途中、若者は自身の名を見抜く。そして乙女は、戦闘によって身体が不自由となり、「漁夫王 Rois Pechierre[40]」と呼ばれている人物について彼にこう告げる。

> ああ！　ペルスヴァル、何て不幸な人、何てあなたは間の悪い人なのでしょう、何も尋ねなかったなんて！　だってあなたはその不自由な身体となった立派な王を治してあげられただろうに、その人は何もかも、身体も領地も取り戻して、しかもとても良い事が起こっただろうに[41]！

乙女は非現実話法を用い、もしもペルスヴァルが質問さえしていたら、王を救うことが出来たのに、と嘆く。乙女はペルスヴァルが肝心の場面で沈黙を守ったことを悲しむ。これはペルスヴァルが知ることになる一連の解き明かしの第一番目である。

その後、アーサー王と円卓の騎士たちに同行したペルスヴァルは、カルリオンへ着く。そこでは祝宴が開かれるが、三日目に突如として黄褐色のラバに乗った一人の乙女がやってきて、ペルスヴァルの罪を告発する。この乙女は、ペルスヴァルの従姉妹が告げた事実の一部を繰り返しながらも、彼が言葉を発しなかったために生じる災いに力点を置き、不吉な未来を予言している。

---

[40] *Perceval*, v. 3520, p. 150.

[41] « Ha ! Perchevax, maleürous, / Come iés or mal aventurous / Quant tu tot che n'as demandé ! / Que tant eüsses amendé / Le buen roi qui est mehaigniez / Que toz eüst regaaigniez / Ses membres et terre tenist, / Et si grans biens en avenist ! » (*Perceval*, v. 3583-3590, p. 153.)

> それに王が領地を治めることもなく、その傷も癒えることがないと、何が起こるか分かっているの？　そのせいで奥方は夫を失い、土地は荒廃し、乙女は後ろ盾を失って孤児になり、多くの騎士が亡くなって、このありとあらゆる不幸があなたのせいで起こるのよ[42]。

乙女は直説法の未来形を用いてペルスヴァルを責めている。漁夫王の城を去った直後に出会った従姉妹は、ペルスヴァルが成し遂げることができなかった行為をかこつにすぎなかった。それに対して、この乙女は具体的な事実 —— 将来起こり得る事実 —— を列挙し、ペルスヴァルをアーサー王宮廷の人々の目前で非難する。

物語の後半以降、グラアルの謎の解明に先行し、ペルスヴァルの血縁関係が説明される。自分の名前を見抜いたこと以外、自身について未だに何も知らないペルスヴァルは、道中で出会った隠者からその出自についての説明を聞く。隠者はペルスヴァルの母がペルスヴァルゆえに命を落としたこと[43]、またペルスヴァルがその出発の際に母を見捨てたという罪ゆえにグラアルを見ても言葉を発することができなかったことを告げる[44]。そして隠者はペルスヴァルの家系にまつわる重要な解き明かしを行う。

> グラアルで給仕されているのは私の兄弟であり、私と彼の姉妹がすなわちおまえの母であった。漁夫王長者という人は、私の思うところでは、あのグラアルで給仕を受けている王の息子であろう[45]。

この言葉から判断すると、ペルスヴァルにはこの隠者とグラアルで給仕を受けているその兄弟という二人のおじがいる。もう一人のおじの息子、すなわち漁夫王はペルスヴァルにとって従兄弟にあたることになる。

これらのペルスヴァルと漁夫王についての情報と相伴って、グラアルという物体の正体が明かされる。9234 行で物語が中断するうちの三分の二に当た

---

[42] « Et ses tu qu'il en avendra / Del roi qui terre ne tendra / Ne n'iert de ses plaies garis ? / Dames en perdront lor maris, / Terres en seront escillies / Et puceles desconseillies, / Qui orfenines remandront, / Et maint chevalier en morront ; / Tot cist mal avenront par toi. » (*Perceval*, v. 4675-4683, p. 198-199.)

[43] *Perceval*, v. 6392-6398, p. 270.

[44] *Perceval*, v. 6409-6412, p. 271.

[45] « Cil qui l'en en sert est mes frere, / Ma suer et soe fu ta mere ; / Et del riche Pescheor croi / Que il est fix a celui roi / Qui del graal servir se fait. » (*Perceval*, v. 6415-6419, p. 271.)

る部分において、グラアルが「ホスチア oiste[46]」を入れる容器であったこと、ホスチアが釣りをしていた人物の父親に栄養を与えていたことが明かされる。

> グラアルはたいそう聖なるものなのだ。それにその漁夫王の父（il）は、もはやグラアルに生じるところのホスチアしか受け付けることのないほどに霊的な存在なのだ。彼は十二年の間そこに居たのであり、お前がグラアルの入って行くのを見た、その部屋から外へと出ることは無かった[47]。

隠者はホスチアの栄養の高さとグラアルの持つ超自然的な力を強調する。グラアルの中で運ばれる食物は、漁夫王を十二年間養うのに十分なものであった。最初の登場場面では、神秘的ながらも未知の物体であったグラアルは、ここで明白に聖性を帯びている。

『聖杯の物語』の語り手は自ら謎の解き明かしをすることはなく、ペルスヴァルの視点に同化して語る。グラアルを巡る冒険は作中で出会う登場人物による説明によって漸層的に進んでいく。彼らはペルスヴァルに同じ事実を告げるのではなく、みな力点をいずれかの事実に置きながら、グラアルとペルスヴァル自身の出自を説明する。それぞれの解き明かしが段階的に上書きされていると考えられよう。

III 語り手の沈黙、あるいは雄弁

『聖杯の物語』の行列の描写において、語り手はグラアルの部屋の中の行き来にもかかわらず、若者が口をつぐんでいたことに焦点を当てる。若者は、道中で出会った賢人ゴルヌマン・ド・ゴルオーの、口を慎むべきだという助言を思い出し、不思議なグラアルの行列を見ても質問せずにいる。

> そして若者はグラアルの行列の通り過ぎるのを見たが、グラアルについて、誰にそれで給仕をするのかと敢えて尋ねることはしなかった、というのも常にあの賢人の言葉が心の中にあったからである。このことは災いをもたらしはしないかと私は思うのだ、なぜならあまりにも黙り込むと、今度は喋りすぎることと同じように非難されると聞いたからだ。良いことになるのかまずいことにな

---

[46] *Perceval*, v. 6428, p. 272.

[47] « Tant sainte chose est li graals. / Et il est si esperitax / Qu'a se vie plus ne covient / Que l'oiste qui el graal vient ; / Douze ans i a esté issi / Que for[s] de la chambre n'issi / Ou le graal veïs entrer. » (*Perceval*, v. 6425-6431, p. 272.)

るのかはともかく、若者はそれについて彼らに何も尋ねないし質問をすることもしない[48]。

3249 から 3251 行では、経験則に基づいた一般論を述べることで、グラアルよりもペルスヴァルの沈黙そのものに注意を向けようと意図している。ここでのペルスヴァルの沈黙は、後の場面からの一連の解き明かしに関する重大な問題となるため、語り手は聴衆あるいは読者に伏線としてあらかじめ伝える。ただし、ペルスヴァルが言葉を発しなかった理由や、沈黙が災いをもたらし得る理由については、語り手自身が沈黙を守っている。ここでの解説は、場面の説明でも予告でもなく、むしろ主観的な意見にとどまっている。ペルスヴァルがグラアルを見つめ、質問を差し控え、そして語り手が意見を述べている間、グラアルは再び二人の前を通り過ぎて行く。

そしてグラアルはその間も若者と城の主人の前を再び通り過ぎたが、彼はグラアルについて、誰にそれで給仕をするのか質問をしなかった。喋りすぎないようにと彼に優しく勧めた賢人のおかげで自制していたのであり、いつも彼の心の中にその勧めをきちんと覚えていた[49]。

語り手がこの場面において、グラアルの行き来の描写を怠らなかった理由は、先に引用した隠者の解き明かしによれば、通常、グラアルは行き来している部屋から外へ出ることはないからであった。語り手がここで伏線を準備していたことは、隠者の言葉によってようやく明らかになる。さらに、語り手のごく個人的な見解によれば、ゴルヌマン・ド・ゴルオーの忠告への盲従ゆえにペルスヴァルは沈黙を貫いたことになる。ところが既に見た、隠者による解釈では、ペルスヴァルの沈黙とは、出発の際に気を失って倒れた母を振り返り見届けておきながら、道を続けたという罪に起因している。語り手によって示されていた一般論は、隠者の解き明かしにより、宗教的次元へと移行している。語り手の個人的感想は、隠者による解き明かしを準備するものであったと言えよう。

---

[48] « Et li vallés les vit passer, / Ne n'osa mie demander / Del graal cui l'en en servoit, / Que toz jors en son cuer avoit / La parole au preudome sage. / Si criem que il n'i ait damage, / Por che que j'ai oï retraire / Qu'ausi bien se puet on trop taire / Com trop parler a la foie[e]. / Ou biens l'en praigne ou mals l'en chiee. / Ne lor en quiert, rien ne demande. » (*Perceval*, v. 3243-3253, p. 138.)

[49] « Et li graals endementiers / Par devant als retrespassa, / Ne li vallés ne demanda / Del graal cui on en servoit. / Por le preudome s'en tenoit, / Qui dolcement le chastïa / De trop parler, et il i a / Toz jors son cuer, si l'en sovient. » (*Perceval*, v. 3290-3298, p. 140.)

ペルスヴァルと、彼を軽蔑していたアーサー王宮廷の家令クーとの決闘の場面において、語り手は、乙女と道化による予言を再び取り上げる。ペルスヴァルの雄姿を描写した後、語り手は、先に引用した乙女と道化の予言の正しさを裏付けるため、「道化の予言は真実であった[50]」と付言する。語り手自らが主人公の運命について予見するのではなく、登場人物により二重化された予言に対して、語り手が解説を行っている。『エレックとエニッド』と『聖杯の物語』には、語り手が物語の展開を明かさず、あくまでも登場人物の口から語らせているという特徴がある。すなわち、語り手は、道化や乙女といった物語世界内の登場人物の言葉を伝達する者にすぎず、彼らの予言を認めているだけである。

『エレックとエニッド』では、二人だけで冒険に出た夫婦に危険が迫るたびに、エニッドはエレックの命令に従うべきか、それとも襲撃者の存在を知らせるか躊躇する。内的葛藤が描写されたあと、結局のところ彼女は声を掛けることになる。そしてエレックは命令を破ったことにより妻を叱責する、というパターンが三回にわたって図式的に繰り返されていた。フランソワ・シュアールが指摘したように[51]、エレックがこの時に用いる表現はほぼ同一であり、エニッドに対する態度にも変化が見られない。三回とも、エレックとエニッドのやり取りが直接話法で引用されていた。しかしながら、その後の四回目にあたる同様の対話の直後では、語り手が地の文でごく短い註釈を付け加えていることに着目する必要があろう。

> エニッドはエレックに伝え、彼は彼女を脅すわけだが、彼女が自分を何よりも大切にしていることが確かめられてよく分かり、自身もこれ以上ないほどに彼女のことを大事に思っているのであり、傷つけようとしているわけではない[52]。

語り手は、エレックがエニッドに害をなそうとしたりしようといるわけではない、という手掛かりのみを与える。三回目までのやり取りの中では、エレックの心理が一切語られていなかった。既に見たように、エレックの行動の真の理由は、彼自身という登場人物の台詞から明かされる。その意図は、4915行目の「あなたを全てにおいて試したのです」（« Bien vos ai dou tot essaïe »）

---

[50] « Voirs fu li devinax au sot. » (*Perceval*, v. 4316, p. 184.)

[51] François Suard, « Réconciliation d'Érec et d'Énide », dans *Chrétien de Troyes et le Graal* (colloque arthurien belge de Bruges), établi par Juliette De Caluwe-Dor et Herman Bract, A-G. Nizet, 1984, p. 38.

[52] « El li dit ; cil la menace, / Mais n'a talant que mal li face, / Qu'il aperçoit et conoist bien / Qu'ele l'aimme sor tote rien, / Et il li tant que plus ne puet. » (*Érec*, v. 3761-3765, p. 296.)

というエレック自身の言葉に集約されている。語り手自身は、登場人物の行為や事実の解き明かしの後、心理分析を行うにとどめる。

以下はいずれも、エレックとエニッドの和解の場面における語り手の解説である。語り手はまず、二人の抱擁後、エレックがエニッドからの自身への愛情を感じ取ったと解説を付け加える。

> エレックはもうエニッドに何ら責めるところを見出せなかった。彼女を十分に試して、自分に対する深い愛を感じたからである[53]。

その後語り手が強調するのは、二人の相互的な関係である。語り手によれば、エレックはエニッドに対して責任があり、エニッドもまたエレックに対して責任があった。

> エレックはエニッドゆえに、エニッドはエレックゆえに、二人とも不幸や辛いことを味わい、そして今、彼らは償いをした[54]。

エレックの告白以降、語り手はもはやエニッドの視点のみを用いることをしていない。視点は再び第三者である語り手へと戻り、二人の心理や行動についての解説を付け加えている。

一方、『聖杯の物語』では、隠者によるグラアルを巡る解き明かしの場面以降、語り手は再び沈黙を通し、存在感を消す。物語後半では、記憶喪失に陥っていたペルスヴァルが聖体拝領を行ったことを要約的に語る。

> このようにしてペルスヴァルは、神が金曜日に死を受け入れ十字架にかけられたことが分かった。復活祭にペルスヴァルはたいへんふさわしく聖体拝領に与った。ペルスヴァルについて、物語はこれ以上語っておらず、彼について話すのを聞くよりも、ゴーヴァン殿についての話を聞いていただきたい[55]。

『聖杯の物語』のグラアルの場面においては、クレチアンは語りの焦点をペルスヴァルに当てていた。語り手は主人公の視点に同化することで、彼の目

---

[53] « Or ne li set que reprochier / Erec, qui bien l'a esprovee / Vers li a grant amor trovee. » (*Érec*, v. 5128-5130, p. 394.)

[54] « Tant ont eü mal et ennui, / Il por li, et ele por lui, / Or ont faite lor penitance. » (*Érec*, v. 5243-5245, p. 402.)

[55] « Issi Perchevax reconnut / Que Diex al vendredi rechut / Mort et si fu crucefiiez. / A le Pasque communiiez / Fu Perchevax molt dignement. / De Percheval plus longuement / Ne parole li contes chi, / Ainz avrez mais assez oï / De monseignor Gavain parler / Que rien m'oiez de lui conter. » (*Perceval*, v. 6509-6519, p. 275-276.)

が見ている範囲の出来事を語ることに専念していた。しかし物語後半では、語り手は自身の視点を通してであれ、ペルスヴァルの視点を通してであれ、物語を能動的に語るという態度を取らず、「物語 estoire」自体の語りに依拠し始める。この「物語 estoire」はゴーヴァンの冒険を中心に語る。これ以後、ペルスヴァルの語りへと戻ることはない。

さらに両作品中では、言葉と対を成す、登場人物によるモチーフとしての沈黙と、語り手による沈黙、つまり語りの宙吊りの技法という、複数の次元での沈黙が重なることで、物語はいっそう雄弁に語られている。エレックの沈黙はエニッドの不安と、聴衆あるいは読者の興味をかき立てる。逆に、エニッドの言葉とはエレックを覚醒させる装置である。エレックとエニッドが冒険をする間の語り手の沈黙は、エレック自身による心理の告白を導く。ペルスヴァルに微笑みかけた乙女の沈黙とは、最高の騎士となる人物の到来を待っていたゆえであった。そして肝心の場面での沈黙により、冒険は失敗のうちに終わり、ペルスヴァルは旅を継続することになる。語り手自身はグラアルについて何らの説明を加えることなく沈黙を守っている。それゆえ、ペルスヴァルも読者も、八百年間以上の間、この驚異的な容器を求めてきたのであり、今後も彷徨することになるのだろう。

おわりに

クレチアンの『エレックとエニッド』と『聖杯の物語』はいずれも、全編を通して語り手による三人称の語りでありながら、登場人物と語り手という視点の交錯を意識的に用いている[56]。語り手は、『エレックとエニッド』ではエニッドの視点に同化し、『聖杯の物語』ではペルスヴァルの視点に同化することで、情報が制約された語りを可能にする。語り手は第三者として、目に見えたものを語るものの、登場人物がその時点で知り得ない事柄については解説を加えることはない。登場人物による謎の段階的な解明が重要な役割を果たしており、語り手はこれを受けて感想や意見を述べるにとどめる。

---

[56] 『聖杯の物語』に関しては、「美的感覚の面での『聖杯の物語』における独自性は、語りの視点の交替と交差にある。私たちに情報を与えるのは、ある時はペルスヴァルであり、ある時はクレチアン・ド・トロワである」（Bernard Guidot, « *Perceval ou le Conte du Graal* : quelques délicates attentions de l'écriture de Chrétien de Troyes », dans *Plaist vos oïr bone cançon vallant ? Mélanges offerts à François Suard*, éd. Dominique Boutet, Marie-Madeleine Castellani, Françoise Ferrand et Aimé Petit, Villeneuve d'Ascq, Université Charles de Gaulle-Lille 3, 1999, t. I, p. 365.）と指摘されていたが、ここにエニッドの視点を加えることが出来よう。

両作品では、最初は不可解で表面的な語りが行われ、次には、ある情報が与えられることによってやや理解の深まる語り、また次には別の情報が与えられることで、さらに理解の深まる語りが用いられているのである。

クレチアンは、自身の最初の作品で用いた、エレックとエニッドの描写の不均衡により可能となる、情報を制約された語りを、遺作においてはペルスヴァル対グラアル、従姉妹や乙女、隠者という、より多様で複雑な関係に発展させたことで、新しい語りの形式を創り出したのではないだろうか。夫婦愛やグラアルといった主題のみならず、クレチアン流儀とでも呼び得る、謎めいて段階的な語りも視点の交錯も、制約された語りとそれによる伏線の回収も、たとえ現代の読者には馴染みのある技法だとしても、中世当時にはほとんど存在しておらず、奇異と言えるものであった。彼の作品には、一種の現代性が認められるのである。クレチアンはどこから着想を得て、なぜ十二世紀当時の他作品とは一線を画した技法を用いたのだろうか。この疑問に答えを提示することは困難であろう。しかしながら、二十一世紀にその作品を黙読する私たち読者の視点から見て、クレチアンが、近現代の小説をはじめあらゆる虚構作品やエンターテインメントにも通ずる技法を、全く独自に駆使していることはよりいっそうの着目に値すると言えるだろう。